

収穫・調製作業を省力化できる大粒で多収の イチゴ新品種「恋みのり」

イチゴ栽培では10a当たり労働時間が年間で2,000時間程度と果菜類の中でも特に多く、その6割程度を収穫・調製作業が占めています。このことが、高収益経営を目指す大規模栽培の実現に向けて大きな支障となっています。そこで、農研機構九州沖縄農業研究センターでは、多収・良食味で栽培しやすく、収穫・調製作業を大幅に省力できるイチゴ新品種「恋みのり」を育成しましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 「恋みのり」は、大粒で、鮮やかな淡赤色～赤色をしたイチゴ品種です(写真1左)。草勢が強く、冬でも生育が旺盛です。花数が多過ぎず、また果房の伸びがよく果実が見つけやすいため、収穫作業の省力化が可能です(写真1右)。さらに、大粒で形状の揃いが良いため、調製作業が大幅に軽減できます。
2. 促成栽培では11月下旬から収穫可能で、単価が高い2月末までの収量が多くなります。
3. 収益性の高い2L以上の大玉率が高く、収穫最盛期における大玉率は8割以上となります。
4. 果実の硬度は適度に高く、輸送に伴う傷みが少なく日持ち性がよいことから、長距離の輸送性にも優れます。香りが強く、糖度および酸度は比較的安定しており、食味は良好です。
5. うどんこ病に対しては中程度の抵抗性を有していますが、萎黄病および炭疽病に対しては罹病性のため、健全な親株から増殖を行うとともに、育苗期を含め予防的な防除が必要です。



写真1 「恋みのり」の果実と着果状況

☆ 活用面での留意点

1. 栽培管理が容易、高収量、収穫・調製作業の省力化が可能という特長を持つことから、パッケージセンターを整備した大規模生産に適する品種として期待されます。
2. 2017年春より、民間種苗会社等を通じて種苗が供給される予定です。
3. 詳しいことは、農研機構九州沖縄農業研究センター園芸研究領域 (TEL:0942-43-8362) までお問い合わせください。

(日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏)